
新潟県音楽コンクール60年記念誌

ハーモニー

Harmony





新潟で育まれた

特別
対談

北原
幸男

×

新通
英洋

音楽文化を、未来へ

新潟県音楽コンクールは、2025年で60回目を迎える歴史ある舞台。

小学生から大人まで幅広い世代の演奏家たちが切磋琢磨し、

音楽と真摯に向き合ってきた軌跡には、時代を越えて響き合う価値があります。

本対談では、第50回から第60回まで審査委員長を務めてきた北原幸男さんと、

第61回から新審査委員長に就任予定の新通英洋さんが、

これまでの歩みを振り返るとともに、新潟と音楽、そして未来への想いを語り合います。

対談会場は、北原さんが教授を務め、新通さんの母校でもある武蔵野音楽大学にご協力いただき、

同大学のモーツァルトホールをお借りしました。

コンクールの60年を振り返って

— 60回という節目を迎える新潟県音楽コンクール。この歩みを振り返って、印象に残っている出来事などがあればお聞かせいただけますか？

新通：私は1979年、高校3年生のときにまずは出場者としてこのコンクールに出会いました。当時はちょうど『スター・ウォーズ』が日本でも話題になっていて、音楽を担当したのはジョン・ウィリアムズ。近未来を感じさせる映画音楽にワクワクしたのをよく覚えています。そんな時代背景もあって、「自分もあんなふう to 人の心を動かす音楽を演奏してみたい」と思っていた時期でした。

新潟県音楽コンクールのことは、新潟日報の新聞記事で知りました。舞台に立つ機会は、若者にとって上昇志向を満たすチャンス。それを後押ししてくれるのが、まさ

にこのコンクールだったと思います。

私は佐渡島出身で、当時は海を渡って新潟市を訪れることが文化に触れる大きな機会でもありました。佐渡島では手に入らないようなレコードを、新潟市のお店で探すのが楽しみだったのです。そうやって音楽に触れる環境が少しずつ広がっていくことが、成長の実感につながっていました。

コンクールに出場した時も、他の参加者が弾いていた曲に驚かされました。バルトークの『ルーマニアンダンス』なんて、私はその場で初めて聴きましたよ。それを、小学生がさらりと演奏しているんですから。

北原：本当にそうですね。審査をしても、小さなお子さんのレベルの高さには毎回驚かされます。本番でもしっかりと自分の力を出し切る、いい意味での緊張感を持っているんですよね。

このコンクールは4つの部門があり、出





場者の年齢層も幅広い。だからこそ、演奏される曲も多彩で、私も審査を通じて初めて出会う曲がたくさんありました。それも含めて、非常に価値のある場だと感じています。

新潟という地域と音楽文化

— 新潟という地域で開催されるコンクールならではの特徴や魅力があると思うのですが、お二人はどのように感じていらっしゃいますか？

北原：4部門のさまざまな出場者たちが、それぞれ予選を経て、同じ日に一堂に会することができる。これは運営上は大変な面もありますが、得られる価値は大きいと思っています。

同じ舞台に立つ経験、そして「ともに参加した」「競い合って仲間になった」という記憶が、年齢や楽器の垣根を越えて、出場者同士のつながりを生むのです。これはとても意義のあることだと思います。

新通：おっしゃる通りだと思います。私も出場した時に、「仲間ができる」という喜びを強く感じました。島で音楽を学んでいた私にとって、こうした出会いは本当に貴重なんです。

佐渡島では当時、男性がピアノを弾くというだけで、少し変わった目で見られることもありました。そんな中で、新潟に行けば同じように音楽を志す仲間がいることがどれほど嬉しかったか。今でも思い出すと、胸が熱くなります。

クラリネットをやっている友人ができたこともそうですし、楽器を超えて、音楽という共通項でつながることができた。45年経った現在でもそのときの友情は続いています。大賞受賞者であろうと予選会のみに参加された方であろうと、出場者みなさんにとって、ここでの経験や時間は豊かな財産になっているのだと思います。

音楽への愛情も育むことができたのもこのコンクールのおかげです。私はこれまで一度も「音楽をやめたい」と思ったことがありません。むしろ、もっと先を見たい、もっと上を目指したいと思わせてくれた。スター・ウォーズのように未来に向けた希望を与えてくれた場だったと思います。

第14回のコンクールで優秀賞をいただいたときには、自分の努力が報われたというだけでなく、「ああ、自分はこれで音楽の道を歩んでいけるんだ」と思えた。まさに後ろから背中を押してもらったような気持ちでした。審査員の先生方やコンクールに関わるすべての方に感謝の気持ちでいっぱいです。

私のピアノの先生が審査員の一人だったのですが、後日聞いたところによると「あなたがとても楽しそうに弾く姿が、審査員

の心を掴んだのよ」とおっしゃっていました。自分でも、演奏や表現力が優れていたとは思いません。ただ審査員やお客様に聴いてもらえることが嬉しく、その様子が審査員の目に留まったのだと思います。

才能の芽をどう見るか、どう育てるか

— 小学生から参加できる新潟県音楽コンクールですが、若い才能を育てるという点でどのような役割を果たしてきたとお考えですか？

北原：予選の段階から、審査員の先生方が細やかに演奏を見てくださるのもこのコンクールの特徴ですね。

審査にあたっては、単に技術的な完成度だけでなく、「その人が音楽を楽しんでいるかどうか」も大変重要だと考えています。音楽は正解・不正解で語れるものではありませんから、その人の表現や個性、舞台に立つ者としての意識、ステージでの所作や表情なども含めて総合的に評価する必要があります。

もちろん審査員の意見が分かれる場面もありますが、それぞれの視点から本当に丁寧に演奏を見てくださって、議論を重ねて、最終的には全体の調和を大切にしながらまとめてくださる。そのプロセスも含めて、このコンクールの教育的価値だと思っています。

新通：審査員の方に選んでいただいたことが、その後の音楽人生の中で自信につながりますよね。この度、審査委員長を引き継ぐことになり、北原先生が10年にわたって委員長として積み重ねてこられたものの重

みをあらためて感じています。

最初にお話をいただいたとき、「喜んで承ります」とお返事したのですが、あとになって「あれ、これはとんでもないことを引き受けたかもしれない」と急に実感が湧いてきました。それほど大きな責任なのだと理解しました。

北原：審査とはいえ、私たちは若い出場者の成長を願いながら向き合ってきました。一人ひとりの未来を想像しながら、その瞬間の演奏を受け止めるような感覚です。音楽を頭だけで勉強するのではなく、社会的背景や歴史的背景も学びながら、心と体で感じて音楽を味わってほしいと思います。

新通：私自身がそうだったように良き仲間や良きライバルに出会えることも成長につながりますよね。子どもたちや若者が、このステージで何かをつかんで帰ってくれるといいなと願っています。それが、未来の音楽文化を支える力になっていくと思いますし、そのためにも私たち審査員もまた、学び続けなければならないと考えています。



コンクール出場者たちの成長

— これまで審査をされてきた中で、特に心に残っているのはどんなことでしょうか？

北原：これまで本当にたくさんの才能と出会うことができました。コンクールを通じて知り合えた若い方とどこかで再会したときに「より一層成長したな」と実感できることが、何事にも代えがたい喜びです。私は教育にも携わっていますので、特にそう感じます。

新通：このコンクールは何度も受ける方が多いですね。小学生、中学生…とステップアップの機会にもなっています。自分が受賞したときのトロフィーは、今でも実家に飾ってあります。私はピアノを勉強してきたけど、プロのピアニストになることはできませんでした。それでも、コンクールに出場することで小さなピアニストにもらったと思っています。審査員の先生方や会場のお客様たちが私をピアニストにしてくれたんですよね。

当日は食事ができないほどの緊張に襲われるんですけど、その気持ちとは別でゲームのような感覚もありました。自分の演奏を聴いてもらえて見てもらえる、その醍醐味をゲーム感覚で味わっていましたね。その後、34歳で受けた指揮者コンクールの時の心境は全く異なり、人生を決める大事な賭けのように感じていました。コンクールは受ける人の心境や立場によってあり方が変わるのだと思います。

北原：受ける目的は、それぞれ違っていいと思います。その中で、何と言っても

大切なのが「選曲」です。審査している中で、他の曲の演奏を聴いてみたいと思うこともあるんですね。

まだ小学生ではありながら、このまま伸びていけば将来が楽しみだなと思えるダイヤモンドの原石のような子もいましたし、クラシックという外国で生まれた音楽に対して鋭い感覚を持っている子もいました。コンクールという場ですから結果を求める気持ちは理解できるのですが、どのような結果であっても、この経験が今後の人生に役に立ってほしいという願いは強く持っています。「賞がもらえなかった」で終わるのではなく、「出場してよかった」と思ってもらえたら嬉しいですね。

新潟県音楽コンクールの未来

— 最後に、これからの音楽コンクールのあり方について、お考えをお聞かせください。

北原：社会のスピードが加速し、オンラインコンサートや生成AIによる作曲など、音楽にもさまざまな変化が訪れています。それでも音楽というものは、やはり人と空間があってこそ成り立つと私は思うのです。生音の迫力や、演奏する人間の息吹。その場にいないければ伝わらないものが、確かに存在するんですよね。新型コロナウイルス流行のために2020年はコンクールを開催できませんでしたが、音楽が人の心に直接訴えかける力や、喜怒哀楽を表現できる素晴らしさを再確認したような思いでした。だからこそ、こうしたコンクールの場がある意義や価値は、これからもっと増していくんじゃないかと思っています。

新通：新潟の芸術や文化の振興に資するためのコンクールでもあってほしいという思いもあります。私自身が新潟出身者ですので、地域の特徴や県民性を踏まえながら、新潟らしい音楽文化を育むようなアプローチをしていきたい。住民のみなさんも上手に巻き込みながら、地域活性化の役割も果たせるといいですね。たとえば、地元のボランティアさんが受付を担当したりしながら、一緒に楽しんでもらえたら素敵だと思います。

北原：世の中にはたくさんのコンクールが存在しています。その中で新潟県の音楽コンクールという独自性を活かしながら発展していくためには、歴史を大切にする部分と柔軟に変化していく部分の両方が必要だと思います。エネルギーが要りますし、痛みも伴うかもしれませんが、思い切ったチャレンジが求められているのかもしれません。すぐに芽が出るとは限りませんが、5年後・10年後の花咲く未来を目指していきたいですね。

新通 英洋

大阪音楽大学特任教授

1961年佐渡市生まれ。武蔵野音楽大学卒業。秋山和慶、小澤征爾、尾高忠明、黒岩英臣、高階正光の各氏に師事。第14回県音楽コンクール優秀賞受賞。第5回フィテルベルク国際指揮者コンクールにおいて第2位ならびに特別賞受賞。これまでに大阪フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、読売日本交響楽団、ポーランド・シレジア・フィルハーモニー管弦楽団等で指揮。2015年、2017年～2019年と続けてロイヤルバンコク交響楽団に客演し、高い評価で絶賛された。現在、豊田市コンサートホール・能楽堂アドバイザー。



北原 幸男

武蔵野音楽大学教授
宮内庁楽部洋楽指揮者

1957年東京都生まれ。桐朋学園大学卒業。尾高忠明、秋山和慶、小澤征爾の各氏に師事。1992年ドイツアーヘン市立歌劇場常任指揮者、1993年～1996年音楽総監督。国内でも、N響、東響、新日フィルをはじめ多くのオーケストラに招かれると共に、新国立劇場、関西二期会などのオペラ公演を指揮し高い評価を得ている。2008年より、天皇后両陛下主宰の国賓を招いての宮中晩餐会、午餐会の指揮者を務める。先の『祝賀御列の儀』パレードでは自身が作曲した御即位を祝う奉祝行進曲『令和』を指揮した。埼玉県富士見市文化芸術アドバイザー。2004年町田フィル、宇都宮大管弦楽団常任指揮者就任。

笛田 博昭

コンクールの受賞が、 夢への第一歩になった



先生の勧めでコンクールへ

新潟県音楽コンクールへの出場は、今思えば私の音楽人生を大きく動かす転機になりました。歌うことは子どもの頃から好きで、学校の合唱などでも「いい声だね」と言われることはありましたが、将来オペラ歌手になろうと考えるのはまだ先のこと。そんな私が音楽の道を志す決定的なきっかけになったのは、高校2年生のときに授業で観た映像でした。ルチアーノ・パヴァロッティが「誰も寝てはならぬ」を歌う姿に衝撃を受けたのです。理屈抜きで心を揺さぶられ、「自分もこんなふうに歌いたい」と強く思いました。

その後、学校の先生方に勧められて高校3年生のときに新潟県音楽コンクールへの出場を決めました。専門的なレッスンを受けていたわけではなく、ほぼ自己流での挑戦。予選直前には声が枯れてしまうハプニングもありましたが、何とか本番に間に合わせました。会場では他の出場者のレベルの高さに驚くばかりです。不安もありましたが、予選通過の知らせを新聞で見つけたときは本当に嬉しかったのを覚えています。

歴代受賞者インタビュー

新潟県音楽コンクールの舞台に立ち、

音楽の道を歩んできた受賞者たち。

当時の挑戦を振り返りながら、

現在の音楽への思いを語ってくれました。

本選では、予選での緊張感を経験していたこともあり、落ち着いて自分の歌を届けることができました。周囲の応援も力になりましたし、純粋に歌う喜びを感じていたように思います。表彰式で自分の名前が呼ばれて驚きましたが、それが音楽の道に進むための大きな自信になりました。

理想の表現に近づく努力を

この受賞をきっかけに、音楽大学への進学を決意。名古屋芸術大学の推薦枠に挑戦し、無事に入学することができました。そこで出会った恩師の教えを受けながら、本格的な音楽の学びが始まりました。あの時、新潟県音楽コンクールでの受賞がなければ、今の自分はなかったと言っても過言ではありません。

プロのテノール歌手として舞台に立ち続ける中で大切にしているのは、毎回全力を出し切ることです。私にとって歌うことは、お客様に届けると同時に、宇宙や神秘的な何かとつながろうとする行為でもあり、その姿をお客様に見ていただくことで何かが伝わればと考えています。

これからコンクールを目指す皆さんには、結果に一喜一憂しすぎず、自分自身と向き合い続けてほしいと思います。芸術に順位はつけられませんが、コンクールは技術を高める大切な機会です。自分の長所も短所も受け止めながら、理想に近づく努力を積み重ねてください。私もまだ道半ば。年齢を重ねても「今が一番いい」と思える歌手であり続けることを目指して表現を磨いていきます。



笛田 博昭（声楽・テノール）31回優秀賞

湯沢町生まれ。敬和学園高校を経て、名古屋芸術大学音楽学部声楽科首席卒業。同大学院修了。第9回マダム・バタフライ世界コンクール及び第50回日伊声楽コンクール第1位。第20回五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。2012年フェッラーラ国際コンクール第1位。「サントリー—万人の第九」「東急ジルベスターコンサート」「NHKニューイヤーコンサート」「クラシックTV」などに出演し、近年メディアへの露出も増えている。オペラ公演においてはタイトルロールなどプリモ・テノールとして数多くの公演に出演、常に好評を博す。新潟県湯沢町特別観光大使。



指導する立場になり、あらためて感じる挑戦の価値

小黒 亜紀

さらに上を目指して

新潟県音楽コンクールは、私にとって特別な場所です。小学生の頃から何度も挑戦を重ね、ついには大賞をいただくことができました。そして今は、指導者として生徒を送り出す立場にもなり、この舞台の重みと意味をあらためて感じています。

最初に出場したのは小学6年生の時でした。新聞に掲載される結果を、家族より先に確認したいと早起きしたものです。名前が見つからず悔しさに泣いた日もありました。中学・高校・大学と回数を重ね、最終的に大学3年生で大賞をいただくことができました。振り返れば、5回の挑戦を経てようやく辿り着いた成果です。

高校2年生の頃、最優秀賞を受賞して「次は一番上を」と目標が明確になりました。その反面、地元のコンクールならではのプレッシャーも大きかったです。周囲からの期待も高まる中での挑戦は、純粋な楽しさだけではなく、精神的な強さも試される経験だったと思います。

すべてが貴重な学びに

今、教え子たちがコンクールに挑戦する姿を見守る立場になり、出場すること自体がどれほど大きな価値を持つかをあらためて感じています。一度きりの舞台に向けて積み上げる練習の日々、本番しか味わえない集中と達成感。それらすべてが、演奏家としての大きな財産になるのです。発表会や演奏会とは違い、点数がつく厳しさも含めてコンクールの貴重な学びです。

今では他のコンクールで審査員を務めることもあります。子どもたちの演奏の背景にある努力がわかる分、真剣に向き合わなければと感じています。

新潟県音楽コンクールは、伝統と歴史ある舞台です。だからこそ価値があり、出場を目指すことが大きな目標になるのです。いつの時代も、この舞台に挑む若い音楽家たちの姿は本当に頼もしいものです。もし出場を迷っている方がいれば、ぜひ勇気を出して挑戦してほしいと思います。本番の舞台に立ち、お客様の前で自分の音楽を届けるあの瞬間は、きっと忘れられない経験になるはずです。

小黒 亜紀（ピアノ）34回優秀賞、36回最優秀賞、40回大賞

新潟市出身。4歳よりピアノを始める。東京音楽大学卒業。これまでに弘中孝、宮崎和子、藤井晶子、村山和子の各氏に師事。第16回日本演奏家コンクール第1位、毎日新聞社賞。第9回ショパン国際ピアノコンクール in ASIA 一般部門アジア大会銅賞など数々の賞を受賞。ヤマハピアノ演奏グレード2級（現在実施されている試験の最上級）取得。オーケストラとの共演や学校訪問、コンサートなど幅広く多彩な活動を展開。現在、県立新潟中央高等学校非常勤講師。音楽教室を主宰し後進の指導を行っている。りゅーとびあアウトリーチ事業第2期登録アーティスト。

自分と向き合う喜びをくれたコンクール

田村 亮太



上達を目指す原動力に

私は4歳からリトミック、6歳からピアノを始めましたが、サクソフォンに出会ったのは中学2年生の頃です。映画『スウィングガールズ』で衝撃を受け、強く憧れました。中学までは野球少年でしたが、高校では吹奏楽部に入り、初めて大勢で演奏する楽しさに触れました。

本格的に音楽を学びたいと音楽大学に進学しましたが、そこでは全国から集まった実力者たちに出会い、自分の未熟さを思い知りました。それでも、音色のクリアさやピュアさは自分の強みだと感じられたのが救いです。技術的な課題は多くありましたが、「自分らしい音楽」を磨こうと努力を重ねて今があります。

大学卒業後は縁あって新潟に戻り、上越教育大学大学院に進学しました。そこで出会った仲間たちとの刺激や、自然豊かな新潟の環境も自分の音楽に大きな影響を与えてくれたように思います。大学院在学中、新潟県音楽コンクールへの挑戦を決意しました。初出場の第50回は優秀賞をいただき、翌年の第51回

では最優秀賞を受賞しました。ただ、今でも「あの時もっとできたのに」という思いは残っています。その気持ちが、今もなお上達を目指す原動力になっています。

大切な挑戦の場として

現在は演奏活動に加え、中高生の指導や社会人吹奏楽団の指揮、一般の方へのレッスンなど幅広く活動しています。吹奏楽や管楽器を取り巻く環境が変化していく中でも、少しでもこの文化の灯を絶やさないよう、微力ながら活動を続けていきたいです。

コンクールは「他人と競う場」と捉えられがちですが、私にとっては「自分と向き合う場」でした。自分の音楽を磨き、表現を深める過程は、まるで自分自身を掘り下げていくような喜びがあります。誰かに評価されるためだけでなく、自分の理想に近づいていくことが、コンクールの本当の魅力だと思います。これからも、新潟県音楽コンクールが多くの奏者にとって、そんな大切な挑戦の場であり続けてくれることを願っています。

田村 亮太 (管楽・サクソフォン) 50回優秀賞、51回最優秀賞

新潟市生まれ。東京学館新潟高等学校吹奏楽部にてサクソフォンを始め、洗足学園音楽大学卒業。上越教育大学大学院修了。ソリストとして新潟県警察音楽隊と共演。オーケストラ内のサクソフォン奏者として山形交響楽団に客演。現在、吹奏楽の技術指導、合奏指導を行うほか、県内外の演奏会にゲスト奏者として数多く出演している。新潟市にてサクソフォン教室を主宰。シンフォニック・アンサンブル・リルト常任指揮者。新潟市民芸術文化会館リューターおよび第4期アウトリーチ登録アーティスト。



成長とともに掴めてきた「音楽を楽しむ」感覚

後藤 苺瑚

自分の音楽を届けることが一番

新潟県音楽コンクールにはこれまで3回出場し、ここで得た経験を糧に全日本学生音楽コンクールでも優勝をすることができました。初出場は小学校2年生の時。練習通りに弾けなかった部分もありましたが、優秀賞をいただくことができて、嬉しかったです。

年齢が上がるにつれて、自分の中で「音楽」との向き合い方が変わってきました。小さい頃はただ与えられた曲を練習していただけでしたが、だんだん「どう弾きたいか」「どんな音にしたいか」を考えるようになりました。それは楽しい反面、悩んだり迷ったりすることも増えてきます。コンクールの準備中は、時間をかけて同じ曲に向き合うので、深くまで考えながら仕上げていく練習になります。その過程は大変ですが、確実に自分の演奏が成長していると感じます。

中学生になってからは、コンクールの舞台に緊張するようになりました。「失敗したくない」「良い結果を出したい」という思いが強くなるほど、プレッシャーも大きくなります。けれど、ステージに出たら「審査員の先

生も、お客さんの一人だ」と考えるようにしています。自分の音楽を届けることが一番大事だと思うからです。

目標がくれる成長と楽しさ

最近ではコンクール以外にも演奏の機会が増えてきました。長岡市で行われたコンサートでは、自分でも驚くほど集中して楽しみながら演奏することができました。舞台袖で感じた緊張も、ステージに立った瞬間に自然と消えていき、お客さまの温かい拍手や支えてくれる先生、家族の存在に助けられました。

これからも、もっと自分の音楽を深めたいと思っています。まだ進路ははっきり決めていませんが、どんな道に進んでも、ヴァイオリンを続けていくつもりです。

コンクールというと「大変そう」と思う方もいるかもしれませんが、でも、目標を持って練習する中で得られる成長や、舞台に立って音楽を届ける楽しさは、かけがえのない経験です。少しでも多くの人にこの楽しさを知ってほしいと思います。

後藤 苺瑚（弦楽・ヴァイオリン）51回優秀賞、54回県知事賞、57回大賞

長岡市生まれ。4歳よりヴァイオリンを始める。ヴァイオリンを奥村和雄、久保田巧の各氏に師事。第13回パッハホール音楽コンクール金賞及びパッハホール賞。パッハホール管弦楽団ニューイヤーコンサート2018にソリストとして出演。第74回全日本学生音楽コンクール小学校の部全国大会第2位。音コン・チアフルコンサート2021にソリストとして出演。第78回全日本学生音楽コンクール高校の部全国大会第1位、併せてサントリー芸術財団名器特別賞を受賞し、1740年製ANGELO TOPPANIの貸与を受ける。新潟県立長岡高等学校理数科2年に在学中。

舞台に立った者だけが得られる貴重な経験

埴 康平



戸惑いと幸せのコンクール

私が音楽に興味を持ったのは、兄が出演していたオペラ「てかがみ」の稽古を見学していたのがきっかけです。小学校入学前の私はソリストの方々に強く憧れ、車の中でいつも真似をして歌っていました。

中学生になると「APRICOT」というりゅーとぴあのジュニア劇団に入り、歌って演じる楽しさにどんどん惹かれていきました。

本格的に声楽の勉強を始めたのは高校2年生の冬です。きっかけの一つに、父の言葉があります。若い人の自死のニュースを見ていた父が「私は内科医だけど心を完全にケアすることは難しいんだよなあ」と話していたのを聞いて、音楽で人の心を癒せる人になろうと決意しました。

新潟県音楽コンクールには高校3年生と大学1年生の時に出場しました。舞台に立った時、広々とした客席を見渡して圧倒され、自分の声が返ってこない感覚に戸惑いました。それでも、この景色の中で歌える幸せを強く感じたことを鮮明に覚えています。賞もいただき、自分の歌が少しずつ評価されていると

いう自信を得ることができました。

劇団四季の専属俳優として

高校卒業後、新潟大学で1年間、東京藝術大学の学部で4年間、別科で2年間、声楽の研鑽を積みました。そして現在は劇団四季の専属俳優となり、お客様に「人生は素晴らしい、生きるに値する」と思っていただけの舞台をお届けできるよう、稽古や本番に励む日々を送っています。今参加している「こころの劇場」は、全国の小学生を無料で劇場にご招待して、舞台芸術の感動を届けるプロジェクトです。「芸術で心を癒したい」という私の原点にも重なり、大きなやりがいを感じています。

新潟県音楽コンクールは、挑戦の機会であると同時に、自分を見つめ直す貴重な場でもあります。賞をいただけることも大変嬉しいですが、それよりも大きなものが挑戦により必ず得られます。結果にとらわれすぎず、今の自分自身を精一杯表現してください。その大きな一歩がきっと大きな未来につながると信じています。

埴 康平（声楽・バリトン）49回、50回優秀賞

新潟市生まれ。東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。同大学別科修了。幼い頃、兄が出演していたオペラ「てかがみ」のソリスト達に憧れ、真似をして歌い始める。中学1年生の時にりゅーとぴあジュニア劇団「APRICOT」に入団し、様々な作品に出演。高校2年生の冬から声楽を習い始める。これまでに声楽を北住順子、上野正人、マウロ・アウグスティーニ、甲斐栄次郎の各氏に師事。令和元年度安宅賞受賞。音コン・チャフルコンサート2023出演。2024年、劇団四季に入団。「オペラ座の怪人」ムッシュー・フィルマン役、「王子と少年」セント・ジョン役を演じている。「ノートルダムの鐘」にもクワイヤとして出演。



コンクールでしか得られない成長

吉井 愛貴

演奏を褒めてもらう体験

小さな頃から、音楽は生活の一部でした。両親の影響で4歳からピアノを始め、幼稚園に行き始めてからは夕食後に練習するのが日課でした。

コンクールとの出会いは、小学1年生のとき。教室の先生に勧められたのがきっかけでした。発表会の延長のような感覚で、毎年のスケジュールに自然と組み込まれていた記憶があります。「今年はどの曲を弾く？」と、当たり前のように準備を始める。運動会などと同じように、私にとってコンクールは季節の風物詩でした。

人前で演奏することが好きで、褒めてもらえることが嬉しくて、「良かったよ」の一言が、次への原動力になっていました。コンクールに出場したことで、音楽界での人脈も広がり、恩師と出会うこともできました。先生のレッスンは、単に技術を教えるのではなく、曲の背景や作曲家の人柄まで含めて音楽を深く捉えるものでした。「この音は何色？」「どんな景色が浮かぶ？」と問いかけられ、楽譜に色を塗りながら想像力を膨らませてい

く。曲と友達になるように自分のものにしていくプロセスを学びました。

刺激を受け、世界が広がる

しばらくコンクールから離れていましたが、20代になり先生から「また出てみない？」と声をかけていただきました。2年連続で出場し、48回には県知事賞を受賞。そのときの演奏は、「ゾーン」に入ったような感覚でした。緊張していたはずなのに、どこかで自分を俯瞰していて、「終わってほしくない」と思いながら弾いていたのです。「自分の演奏が好き」と思える状態で臨めたからこそ、自然体で表現できたのかもしれません。

音楽を学んできて感じるのは、コンクールでしか得られない成長があるということです。私はさまざまな刺激を受けて、自分の世界を広げることができました。たくさんの演奏に触れ、たくさんの作曲家に出会い、ひとつずつ吸収して自分の糧にしていく。それは、良い結果でも悔しい結果でも得られるもの。出場する価値はそこにあると思います。

吉井 愛貴 (ピアノ) 39回優秀賞、48回県知事賞

新発田市出身。4歳からピアノを始める。新潟県立新潟中央高等学校音楽科卒業。国立音楽大学演奏学科鍵盤楽器専修ピアノ卒業。アドヴァンストコース修了。第16回第18回JPTA本選会出場。新潟県音楽コンクール50周年記念コンサート、チアフルコンサート2021出演。ケヴィン・ケナー氏レッスン受講。渡独し、ヤコブ・ロイシュナー氏に師事。独国ハレにてマスタークラスを受講ディプロマ取得。英国ロンドンにてコンサートを行う。ピアノを長谷川光子、相馬上子、大原崇子、奈良希愛の各氏に師事。声楽を竹内友子に師事。伴奏法を今井顕、星野明子の各氏に師事。音楽の持つ力と魅力を届けられるよう演奏活動を行う。

新潟県音楽コンクールに寄せて

元審査員・作曲家・上越教育大学名誉教授

後藤 丹

コンクールの発展にご尽力された後藤丹さんより、ご寄稿をいただきました。1996年から2023年まで審査員を務められ、チアフルコンサートや周年記念コンサートでは監修や企画の中心としてご活躍くださいました。

今年は新潟県音楽コンクールの60回の記念の年だそうです。

私が少年の頃、多分十代だったヴァイオリンの佐藤博志さんや、声楽の押見栄喜さんが演奏していたのを覚えています。会場は今はない新潟市の公会堂か。調べてみると昭和44年第4回のことらしい。

過去の受賞者の名簿をつらつら見ると、その後活躍している演奏家の名があちこちにある、というよりも新潟県出身の演奏家でこのコンクール経験のない人がむしろ少ないくらいに思われます。

私がピアノ部門の審査員になったのが平成8年で、一昨年に定年で辞するまで27年間務め、歴代の審査委員長として金子建志さん、平野昭さん、野本由紀夫さん、北原幸男さんと一緒に過ごさせていただきました。識見豊かな方々であり、審査の合間にいろいろと貴重なお話を伺うことができたのは楽しい思い出です。

ところで、過去に出場した方から「いただいた講評はとってあります」と言われることがよくあります。予選会で審査員がその部門の出場者全員にコメントのようなものを書きます。演奏中の数分間の仕事なので、四苦八苦するのですが、できるだけ具体的なアドバイスをお渡しするよう心掛けてきました。字の下手な私は保管されているのが恥ずかしいし、内容もほとんど覚えてないのですが、笑顔で言ってこられるのは何か役に立ったのか、それにより奮起したのかと思うことにしています。順位を出すだけではなく、演奏を通じた対話の場になっているとしたら嬉しいことです。

節目の年に記念コンサートを開催したことも嬉しい記憶として残っています。私が関係してからは、審査員とこれまでの入賞者が一緒に出演する形が定着しました。

最近—令和3年と5年に実施した「チアフル・コンサート」では運営委員と事務局、審査員と受賞者たちが協力し合い、小編成のオーケストラまで編成して心に残るコンサートを成功させました。こういった企画も、伝統の一つとして存続することを望んでおります。

さて、次年度から審査委員長に就任予定とお聞きしている新通英洋さんは今活躍中の指揮者。私の古くからの友人で、真摯に音楽と向き合ってきた人です。高校時代にピアノ部門で入賞した経験があり、おそらく審査委員長として初の新潟県出身者でしょう。

このコンクールが引き続き幅広い人材を輩出し続けることを望んでいます。

審 査 員 、 か く 語 り き 。

真剣に挑む出場者たちに応えるべく、審査員もまた全力でコンクールに臨んでいます。

その熱い思いや未来への願いを聞きました。

音楽はずっと、人生のそばにいる

伊奈 るり子 (管楽)

私は2002年に審査員を拝命しましたが、最初は自分で務まるのかという不安でいっぱいでした。管楽は対象が広く専門外の審査をすることもあります。審査員の先輩方に助けられながら少しずつ経験を積んできました。これまで数々の思い出がありますが、複数の大賞候補者から一人を選ぶ難しさに直面したり、本選で伴奏用のピアノの弦が切れるトラブルが発生したり、筋書きのないコンクールならではの場面も経験しました。

出場する皆さんは、それぞれの思いを抱えてステージに立っています。最近、中

学生同士で参加する姿に心を打たれました。同じ学校の友人が伴奏を務め、一緒に演奏に臨む姿はとても微笑ましく、青春そのものだと感じました。こうした参加がもっと増えてほしいと願っています。

音楽の道は決して平坦ではありません。家庭の事情で進学を断念した方もいます。でも、コンクールでの経験は人生のどこかで必ず生きると信じています。たとえ職業にしくなくても、音楽は人生のそばにいてくれます。だからこそ、挑戦すること自体に大きな意味があるのです。

演奏から伝わってくる、音楽の喜び

相馬 上子 (ピアノ)

予選の審査では「公平に見ること」を大切にしています。音楽は聴く人によって感じ方が異なるため、主観や偏りが出ないように意識しています。本選では、表現がいかに会場全体を魅了したかに重点が置かれます。

私が審査員を務めるようになった当初は、本選会場は現在のりゅうとびあでなく、新潟県民会館でした。会場の構造が異なるため、音の響き方も違います。90年代から2010年頃までは参加者が多く、予選審査は午前から始まり18時頃まで続いたものでした。

時代が移り変わり、音楽を聴く手段は多

様化していますが、楽器を演奏する難しさや面白さは変わることはありません。

これから出場を目指すみなさんは、ぜひ自分なりにリハーサルをしてきてください。いつもより少し広い空間で家族や友人の前で弾くだけでも、練習とは違う空気を体験できると思います。

学生のみなさんはもちろん、社会人の参加も増えてほしいですね。生き生きとした音楽の喜びが伝わる演奏者との出会いは嬉しいものです。年齢を問わずぜひ参加していただきたいと思います。

一人でも多くの挑戦者に出会いたい

五十嵐 郊味 (声楽)

私が審査員として願ってきたことは、声楽の裾野を広げていくことです。新型コロナウイルスの影響もあり、近年趣味として歌を楽しむ人が減ったのは寂しいですが、声楽は楽器演奏とは異なり、「言葉」を扱う音楽です。日本語の響きや、歌詞の意味を大切にすることで、聴く人の心に届く表現を目指すことができます。

コンクールへの挑戦を続けた出場者が、大きな賞を受け取った瞬間は嬉しく感じます。受賞を弾みに、イタリアやフランスへの留学へと進んだ方もいます。また、以前は本選会の後に交流会が開かれていました。

出場者が審査員に直接アドバイスを受けることができる貴重な場でしたので、再開されることを期待します。審査員の私たちも、そのような場で音楽を志す人たちに背中を見せられる存在であり続けなければなりません。

どんな年齢の方でも、挑戦する気持ちは素晴らしいものです。その時点で審査員として拍手を贈りたい気持ちです。自分の声で人を元気にしたい、地域を明るくしたいという思いを持つ方が、一人でも多くステージに立ってくれることを願っています。

今の自分にできる、精一杯の表現を

渋谷 陽子 (弦楽)

私は高校時代に新潟県音楽コンクールに出場し、今は審査員として出場者たちの演奏に刺激を受けています。小学生クラスで驚くほどレベルの高い演奏に出会うことがあり、感動を覚えます。

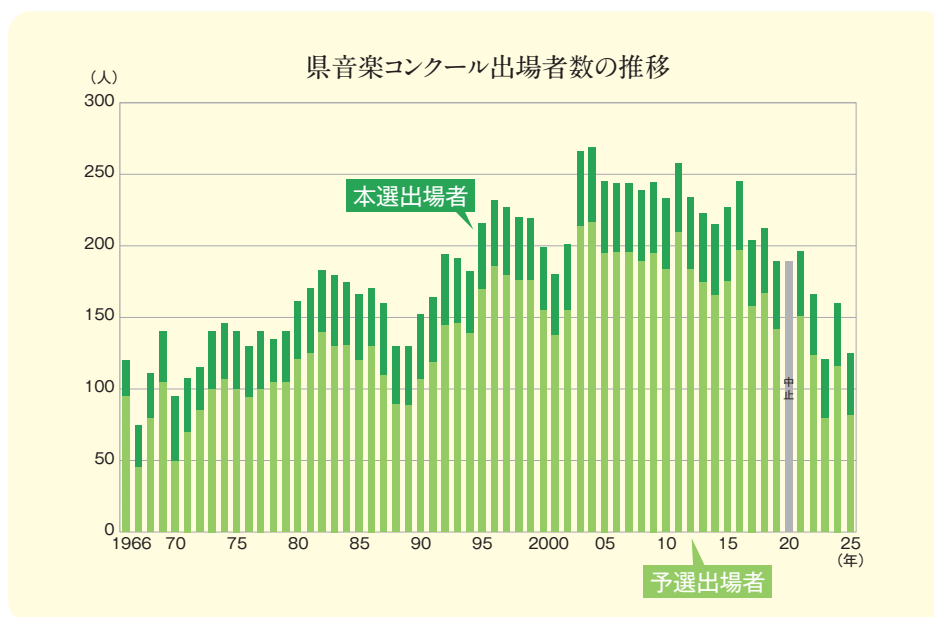
弦楽部門は、ヴァイオリンやチェロなどの異なる楽器が対象となり、出場者の年齢も幅広く、同じ曲を弾くわけでもありません。年齢や楽器の特性をふまえた評価が求められます。だからこそ、演奏の中で「今できる精一杯の表現」を丁寧に汲み取るよう心がけています。予選会では出場者一人ひとりへの審査コメントを書きますが、少

しでも励みになるようなメッセージを届けたいと思っています。

近年、子どもたちの音楽への向き合い方が変わってきたように感じます。以前は「音楽を最優先に」という子が多かったですが、今は他の習い事と並行して学ぶ子も増えました。そんな中で、コンクールも「まずは挑戦してみる場」として活用してもらえたら嬉しいです。何度か出場を重ねることで力を伸ばしていく子もいます。地元にこうした舞台があることを、ぜひ前向きに活かしてほしいと思います。

新潟県音楽コンクール 受賞者一覧

第1回(1966年)～第59回(2024年)



新潟県音楽コンクール受賞者一覧

回	部門	賞	ピアノ部門	弦楽部門	声楽部門	管楽部門
第 1 回 1966年 (昭和41年)	一般	ジュニア 1位 2位 3位 4位	小林こずえ 砂田 恵美	岡 礼子	鹿島 恵子	
		一般 1位 2位 3位	須藤 葉子	佐藤 博志	滝田 洋子	
第 2 回 1967年 (昭和42年)	大最優秀賞	賞 優 秀 賞	(小) 木口 玲子 (中) 吉川 優子 (高) 若林 陽子 内山 和子	な し	川上美枝子	玉井 竜
第 3 回 1968年 (昭和43年)	大最優秀賞	賞 優 秀 賞	剣持 清子 上田 京子 安部 恵 山崎 真澄 田原 陽子	な し	岩淵 竜夫 中島みさ子 押見 栄喜	手塚 実 吉田 豊晴 武田 正志 伊藤 孝子
第 4 回 1969年 (昭和44年)	大最優秀賞	賞 優 秀 賞	剣持 清子・矢野 賀子	佐藤 博志	押見 栄喜	山田 峰夫
第 5 回 1970年 (昭和45年)	大最優秀賞	賞 優 秀 賞	阿部 恵子 赤沼 直美 吉川 優子 小林こずえ 山井千歳・今井厚子 高橋いづみ・斎藤暁美 竹内可江子・渡辺須賀子 青山澄子・加藤悦子	な し	遠藤ノリ子 秋元 茂子	後藤 宏 吉田 裕美
第 6 回 1971年 (昭和46年)	大最優秀賞	賞 優 秀 賞	柳原 薫 佐藤 季里 白川 浩 八子真由美・渡辺直子 大沢 孝子・永井優子	大関 博明 庄司 真澄	な し 秋元 茂子 幸田 寛子	な し 根津 雄一 山田 峰夫 中村 忠雄 渡部 正
第 7 回 1972年 (昭和47年)	大最優秀賞	賞 優 秀 賞	星野 雅美 小林 範子 米持 隆之 駒形理恵子・河田 澄子	な し	な し 太田 茂	山賀 洋介 島 健介 阿部 世一 荻野 京子
第 8 回 1973年 (昭和48年)	大最優秀賞	賞 優 秀 賞	小山 亮子 — 澄子 河田 慶子 新部 慶子 山崎 尚子・小川 淳子	な し 市村 光雄	小竹 紀子	藤野 浩一 土谷 規子 河本 隆吉
第 9 回 1974年 (昭和49年)	大最優秀賞	賞 優 秀 賞	石田美千代 — 恭子 酒井 景子 岩田 隆之 米持 香里 小山 郁子 剣持 長部 靖子 小林 範子・長部 月岡知佳子 樋口みのり	な し 横山 晶子	な し	山賀 洋介 佐藤 史朗
第 10 回 1975年 (昭和50年)	大最優秀賞	賞 優 秀 賞	奥村 和子 藤山 祐子 青池 春美 新部 亨子 杉本 裕子 金沢 恭子 吉田 真吾 増村美智江 斎藤 善子・安達 直子	な し な し	な し 泉 アツ子	な し 中林 恭子 西村日出雄
第 11 回 1976年 (昭和51年)	大最優秀賞	賞 優 秀 賞	駒形理恵子 粉 正子 青木 明美 金子 弘美 月岡 佳子 岩田 景子・小柳美奈子	な し 三浦 勲 鈴木 裕子	丸山たい子 — 丸山 優子 瀬下 明子	な し 金子 孝澄 渋谷 松治

新潟県音楽コンクール受賞者一覧

回	部門	賞	ピアノ部門	弦楽部門	声楽部門	管楽部門
第 12 回 1977年 (昭和52年)	大最優 優秀 賞	賞 賞 賞	な し 星野久美子 藤井 和子 小柳美奈子 水野 淳子 管嶋郁美子 渡辺 直人 渡部 謙 伊藤真樹子・木戸 聡美	安藤 ハル	根来 加奈 谷川須佐男	村山 文隆 大場 雅夫
第 13 回 1978年 (昭和53年)	大最優 優秀 賞	賞 賞 賞	石橋 洋子 — 水島 和美 小柳美奈子 市村 哲子 八子真由美 新保 裕子	な し 浅野 桃子	本多 雅代 池上 裕子 関矢 順	高橋 幸世 佐藤 新 田中 玉恵
第 14 回 1979年 (昭和54年)	大最優 知優 事秀 賞	賞 賞 賞	八子真由美 田中 万理 今成真理子 阿部 一美 森山万寿美 伊藤真樹子 新通 英洋 白川 浩	小牧 千純 —	保坂ゆかり — 立花 利恵	斎藤 孝久 渡辺 匠
第 15 回 1980年 (昭和55年)	大最優 知優 事秀 賞	賞 賞 賞	白川 小柳美奈子 — 千春 程内美和子 今成真理子 伊藤 淳子 永井 保子・永井 恵子	な し 小川 泰	な し 本多 雅代 尾崎 仁美 関矢 順	な し 山井 裕樹 程内 隆哉
第 16 回 1981年 (昭和56年)	大最優 知優 事秀 賞	賞 賞 賞	関屋 直美 — 鳥湯由起子 貝津 理恵 今成真理子 山口 雄子 薄田 直子	な し 伊藤 美香	な し 本多 裕子 池上 裕子 関矢 順	土肥 真人 —
第 17 回 1982年 (昭和57年)	大最優 知優 事秀 賞	賞 賞 賞	草間 美和 — 諏佐 恭子 高橋 千佳 金子めぐみ 田中 万理 鈴木 尚子 森山万寿美 池田 透 小熊佐和子 山岸 由季	三浦 勲 林 春奈 山岸 尚樹	本多 裕子 石塚 勇 堀 いくよ 関矢 順	高橋 幸世 — 波多野 誠 小熊 一弘
第 18 回 1983年 (昭和58年)	大最優 知優 事秀 賞	賞 賞 賞	村山千賀子 — 谷口 玲理 白岩 貴子 丸山 暁子 田中 万理 今井 窓雅 山口 雄子 池田 透 内山 和子 神田 薫	津森奈保子 小佐絵子 鈴木 望	渡辺 直人 — 玉木 麻子 永沢 健子 高坂 典子	な し 橋木 惠 栗岡 由美
第 19 回 1984年 (昭和59年)	大最優 知優 事秀 賞	賞 賞 賞	金子めぐみ — 池田 透 細川 智美 佐藤 雅美 藤井多美子 高橋 千佳 稲井 明子 笹川 京子 小川 泰 八子真由美	関口 智子 野上 綾子 本間 仁	藤平 久志 — 星野 克美 堀 いくよ 斎藤 裕昭	永井 亮子 吉川 和江 田村 美雪 中村 智子

新潟県音楽コンクール受賞者一覧

回	部門	賞	ピアノ部門	弦楽部門	声楽部門	管楽部門
第 20 回 1985年 (昭和60年)	大県最優 知優秀 事秀賞 賞賞賞		沼 伊佐美 — 井上多美子 古塩瑞穂 小田美紀子 稲井明子 岩沢正顕 田中万理 武田美香 中島範子 伊藤久美子	渋谷 陽子 鈴木望彩 藤木彩由美 牧田由美	横山 照美 小杉典子 藤巻真美	横山 紀夫 浅利守宏 外川孝音
第 21 回 1986年 (昭和61年)	大県最優 知優秀 事秀賞 賞賞賞		小杉 真二 矢野いづみ 丸山由紀子 山吉彩子 藤田美香 岩沢正顕 稲井明子 池田透	な し 吉田 孝子	小林 禎 — 小池 寿枝 伊藤 裕子 小杉 典子 藤田ゆかり 箕輪 健 関 珠木	星 伸子 — 徳田 成男
第 22 回 1987年 (昭和62年)	大県最優 知優秀 事秀賞 賞賞賞		池田 透 佐藤 瑞枝 三上範子 丸山由紀子 湯浅友子 早川園子 高橋千佳 稲井明子 北原隆示・保科誠一郎	牧田 由美 — 吉田 孝子 根津 要 鈴木 望	石田智恵子 — 刈谷 圭子 佐々木朋也 佐々木ひろ美	藤井 章 徳田 成男
第 23 回 1988年 (昭和63年)	大県最優 知優秀 事秀賞 賞賞賞 奨 励 賞		池田 透 桑原 香苗 山吉彩子 井上多美子 中村康子 岩沢正顕 稲井明子 今成真理子	吉田 孝子 — 藤木 彩 大和 淳	土崎 宏人 — 布施真理子 高杉 麻子 風間 左智 佐々木ひろ美 小田原直子	浅利 守宏 木竜 治
第 24 回 1989年 (平成元年)	大県最優 知優秀 事秀賞 賞賞賞 奨 励 賞		池田 透 — 山形 明朗 荻上 尚子 林 理恵子 成嶋 志保 関澤 紀子 相沢亜希子 井上多美子 菊池 円香 大屋 恭子 名児耶恭子・安食 純子	小熊佐絵子 — 村山 泉	山田 智秋 竹内 公一 永井 優子 若井 敦子	酒井 俊二 吉田亜希子
第 25 回 1990年 (平成2年)	大県最優 知優秀 事秀賞 賞賞賞 奨 励 賞		小出真理子 仲川 慶美 栃倉 未知 金田 英樹 関澤 紀子 橋本 葉子 谷口 玲理 佐藤 瑞枝	鈴木 桂 — 佐々木友子 村山 泉	佐藤 泰弘 — — 阿部 愛美 高波 札子 相澤真由美	(徳田 成男 斎藤 弦子 川村 裕子

新潟県音楽コンクール受賞者一覧

回	部門	賞	ピアノ部門	弦楽部門	声楽部門	管楽部門
第 26 回 1991年 (平成 3 年)	大県最優 知優 事秀 賞賞賞賞	大県最優 知優 事秀 賞賞賞賞	な丸山し 古屋亜希子 長谷川舞衣 村松村泰子 市幸幸子 浪花美保 稲井明子 栃倉未知	村山 泉 — 小杉 芳之 小糸 恭子	梅山 隆子 — 阿部 理恵 星野 恵里 小杉 典子	平田 和彦 広川 美穂
第 27 回 1992年 (平成 4 年)	大県最優 知優 事秀 賞賞賞賞	大県最優 知優 事秀 賞賞賞賞	谷口 玲理 — 寺沢 光 石田 まり 石田 佳子 藤山和明 山形朗 直也・和田 阿部麻友恵子	松村 牧子 — 鈴木 花恵 佐々木友子 広川 抄子	小池 寿枝 児玉 祥子 平沢 秀樹	脇坂 恵 青木 由美 藤井 裕子
第 28 回 1993年 (平成 5 年)	大県最優 知優 事秀 賞賞賞賞	大県最優 知優 事秀 賞賞賞賞	小林 恭子 山田江里 渡辺愛子 山倉章代 山倉未香 桑原さやか 土屋か 桑山 揚子	井上 静香 — 富永希和子	なし 大門 愛 相田めぐみ 刈谷 圭子 星野 克美 山下 尚子	本間 千也 — 後藤 靖子
第 29 回 1994年 (平成 6 年)	大県最優 知優 事秀 賞賞賞賞	大県最優 知優 事秀 賞賞賞賞	桑山 揚子 北村と美 松山景子 山田江利 山谷川真 長谷万理 宮島里 貝津摩 伊藤 直	な し 藤川 朋 庄司 愛	竹内 公一 — 高橋 さやか 高橋 奈穂 佐藤 晶子	栗川かおり — 後藤 靖子
第 30 回 1995年 (平成 7 年)	大県最優 知優 事秀 賞賞賞賞	大県最優 知優 事秀 賞賞賞賞	市村 幸恵 — 若杉合恵 宮川清子 白井匠 坂場孝子 山家慶子 小林 恭子	鈴木 花恵 宮入 理恵	近藤 綾 高橋 さやか 永井 優子	阿部美恵子 — 酒井 佳子
第 31 回 1996年 (平成 8 年)	大県最優 知優 事秀 賞賞賞賞	大県最優 知優 事秀 賞賞賞賞	高木 明子 山田江利子 内藤 陽介 松山景子 神田 藍水 品田 真彦 篠原 絵美 大谷内陽子 小林里加 本村加奈絵	根津 新	山下 尚子 笛田 博昭 片貝 明美 星野 克美 塚原はる美	小関 優子 五十嵐 文
第 32 回 1997年 (平成 9 年)	大県最優 知優 事秀 賞賞賞賞	大県最優 知優 事秀 賞賞賞賞	小林 祐未 平田尚子 石川辰弥 若杉百恵 相馬杏奈 中山菜月 石田佳子 関本菜穂子	渡辺 靖子 加藤 礼子	小川 伸子 園部 文栄 川口 まみ	松井 美瑞 三浦 雄太 小林 道子
	大県最優 知優 事秀 賞賞賞賞	大県最優 知優 事秀 賞賞賞賞			高山 優子	真水 京子

新潟県音楽コンクール受賞者一覧

回	部門	賞	ピアノ部門	弦楽部門	声楽部門	管楽部門
第 33 回 1998年 (平成10年)	大県最優 知優秀 事秀賞 賞賞賞	大県最優 知優秀 事秀賞 賞賞賞	山田江利子 遠藤千亜規 湊元なつみ 林優子 水沢沙織 竹内麻衣 相馬杏奈 松山景子 山田章代 品田真彦 鈴木麻利江 伊藤千佐子 林佐紀	根津潤 高橋岳太 根立紀子	佐藤美和 岡崎藍子 滝沢すみれ	三浦雄太 渡部瞳
第 34 回 1999年 (平成11年)	大県最優 知優秀 事秀賞 賞賞賞	大県最優 知優秀 事秀賞 賞賞賞	山田真保 相馬杏奈 浅井史子 加藤那穂子 浅香みのり 広川哲太郎 近藤七恵 家富希紀 小黒亜智 相原一智 和田麻友美・近きぬよ	高橋 岳太	山本由佳子 川名翔子 長川慶 永楠康子	浦本洋平 関塚文子 渡辺 茜
第 35 回 2000年 (平成12年)	大県最優 知優秀 事秀賞 賞賞賞	大県最優 知優秀 事秀賞 賞賞賞	梅津幹子 堀井祥子 岩渕咲季 石山華子 高橋遼葵 阿部奏 高野菜々子 加藤那穂子・石月 愛香	後藤はる香 枝並友希 加藤礼子	近藤 綾 吉原教夫 桜庭章子 荻野美智江	近 雅美 佐藤宏美
第 36 回 2001年 (平成13年)	大県最優 知優秀 事秀賞 賞賞賞	大県最優 知優秀 事秀賞 賞賞賞	土田朋佳 小黒亜紀 西脇里菜 山本啓介 湊元なつみ 田中沙知 加藤容子 丸山亜希子	佐々木友子 大野有佳里	岡崎 映子 清水咲子 吉原教夫 鈴木涼子 細野祥子	明田川結佳 佐藤 宏美 松本 美岐
第 37 回 2002年 (平成14年)	大県優 知秀 事秀賞 賞賞賞	大県優 知秀 事秀賞 賞賞賞	大谷内陽子 若杉百合恵 大野有佳里 森田佑菜 河本響子 林優子 小野塚円佳 大越麻理奈 浅香みのり 佐藤容子 島村裕志 石田佳子	太田 玲奈 高橋 百合	山崎知子 池田一江 中村由香 伊東大智	明間奈々江 五十嵐 文
第 38 回 2003年 (平成15年)	大県最優 知優秀 事秀賞 賞賞賞	大県最優 知優秀 事秀賞 賞賞賞	坂口明 松木夏奈 古川彩音 樋山海央 山田葉子 小林浩子 木戸口陸 浅香みのり 高橋沙紀 竹内紀子 相原一智 相原敬子 齋藤綾香	枝並清香 河本彩 森澤紗弓 高橋百合	田辺千枝子 濁川絵里香 駒形加奈子 高山 優子	広瀬寿美 小林陽平

新潟県音楽コンクール受賞者一覧

部門	賞	ピアノ部門	弦楽部門	声楽部門	管楽部門
回					
第 39 回 2004年 (平成16年)	大 県 最 優	知 優 秀	事 秀 賞	賞	
	大 県 最 優	知 優 秀	事 秀 賞	賞	
第 40 回 2005年 (平成17年)	大 県 最 優	知 優 秀	事 秀 賞	賞	
	大 県 最 優	知 優 秀	事 秀 賞	賞	
第 41 回 2006年 (平成18年)	大 県 最 優	知 優 秀	事 秀 賞	賞	
	大 県 最 優	知 優 秀	事 秀 賞	賞	
第 42 回 2007年 (平成19年)	大 県 最 優	知 優 秀	事 秀 賞	賞	
	大 県 最 優	知 優 秀	事 秀 賞	賞	

新潟県音楽コンクール受賞者一覧

回	部門	賞	ピアノ部門	弦楽部門	声楽部門	管楽部門
第 43 回 2008年 (平成20年)	大	賞	山崎 慶子 小林 浩子 鈴木 麻生 丸山友紗理 中濱保菜美 末武 英恵 稲田 夏帆 二宮麻里子 阿部 沙衣子・川上 実李	近藤 ほなみ 河本 彩 木野 裕り乃	原 璃菜子 松村 綾菜 鎮西 幸恵 滝田 繁美	宮尾 寛子 栗岡 美央 川村 杏枝
	県知事	賞				
	最優秀	賞				
	優秀	賞				
第 44 回 2009年 (平成21年)	大	賞	山田香葉子 鈴木 莉歩 島田 美和 佐藤 海月 丸山友紗理 宮崎 真滉 安原 奏 村山 一聖 阿部沙衣子 宮川 清子 加藤 桜子	望月 拓見	高橋 維 鎮西 幸恵 小栗 志乃	内山 直哉 石崎 彩夏 住吉 雄一
	県知事	賞				
	最優秀	賞				
	優秀	賞				
第 45 回 2010年 (平成22年)	大	賞	関 陽平 金川 唯 原田 大希 揚石真衣子 阿部 彩乃 荒井 玲奈 阿部沙衣子	木野裕り乃	高野 実可 中村友里香 古俣ひかる 伊藤 舞	五十嵐冬馬 住吉 雄一 栗原茉莉子
	県知事	賞				
	最優秀	賞				
	優秀	賞				
第 46 回 2011年 (平成23年)	大	賞	柴野 絢子 安原 奏 清水明日香 大塚 麻由 中野久太郎 加藤 優里 荒井 玲奈 鈴木 桃子	石井 柚花	高橋 希絵 中村友里香 熊倉 由佳	吉田 秀行 岡田 宏枝 小林 陽平
	県知事	賞				
	最優秀	賞				
	優秀	賞				
第 47 回 2012年 (平成24年)	大	賞	室井まりか 山口愛佐子 太刀川絃子 中野 万留 佐藤 海月 近藤 真代	野口万佑花 斎京 法子	伊東 大智 近藤 美里 桑野 彩 近藤 美里	川村 杏枝 杉本 彩恵 尾崎 博也
	県知事	賞				
	最優秀	賞				
	優秀	賞				
第 48 回 2013年 (平成25年)	大	賞	中野 久太郎 佐藤 玲奈 近藤 月海	中野 久太郎 佐藤 玲奈 近藤 月海	中野 久太郎 佐藤 玲奈 近藤 月海	中野 久太郎 佐藤 玲奈 近藤 月海
	県知事	賞				
	最優秀	賞				
	優秀	賞				

新潟県音楽コンクール受賞者一覧

回	部門	賞	ピアノ部門	弦楽部門	声楽部門	管楽部門
第 48 回 2013年 (平成 25年)	大	賞				庭野 宏樹
	県知事	賞	吉井 愛貴			清水 香
	最優秀	賞	三宅 月海		窪 瑤子	
	優秀	賞	山崎 紬斗 稲垣 汐音 佐藤 みのり 櫻庭 稜太 刈谷 優里 井口 菜佳 丸山友紗理 片山 奈子 梅澤 季生 鈴木 莉歩 高橋 萌香	伊野 晴香	奥山 裕樹 高津 亜美	小川 紗季 丸山 瑞生
	奨励	賞	稲田 夏帆			
第 49 回 2014年 (平成 26年)	大	賞			山崎 由佳	
	県知事	賞	土屋 光			渡辺 梨乃
	最優秀	賞	相原 一智	斎京 法子		
	優秀	賞	白井 花音 上坂 哲生 中野 万留 桜庭 稜太 大塚 麻由 古川 大智 小杉 卓万 片山 奈子 鈴木 莉歩 相田 沙莉 高橋 萌香 二宮 彩葉 麻里子 玉木 彩葉	大島みなみ	比護 慧子 塙 康平 桑野 彩 広沢ひとみ	小川 紗季 新川紗耶加
	奨励	賞				築取 佳奈
第 50 回 2015年 (平成 27年)	大	賞			吉田 早穂	丸山 瑞生
	県知事	賞	田中健太郎			
	最優秀	賞	田口 侑果			
	優秀	賞	志田 百葉 梅川 優愛 上坂 哲生 桜庭 稜太 石口 あみ 高橋 悠花 深海 侑希 白幡 美乃里 丸山友紗理 安藤 未玲	岩端 華澄 野村 彰汰	石川 龍太 松村 祐甫 塙 康平	古俣 友相 田村 亮太
	奨励	賞	稲垣 汐音			
第 51 回 2016年 (平成 28年)	大	賞	高橋 萌香			
	県知事	賞	鈴木 桃子		桑野 彩	田村 亮太
	最優秀	賞	山崎 紬斗			
	優秀	賞	東宮まゆか 水沼 志帆 金子宗甫 中野 亜美 志田百葉 関塚 羽美 上坂哲生 刈谷 優 竹内優姫 成田 みや 丸山友紗理 小林 千花 西田遼太郎 塚原 万裕	後藤 苺瑚 山内 睦大	中野 太一 武藤 正晃	今井 瑞希 小菅 春貴
	奨励	賞				鷹田 わこ
第 52 回 2017年 (平成 29年)	大	賞				石崎 彩夏
	県知事	賞	馬上 敏徳			
	最優秀	賞	石井 宥輔	山内 睦大	高津 亜美	
	優秀	賞	島田 陽葵 斎藤 菜央 志田百葉 山崎 紬斗 鈴木俊大 古川 大智 鈴木菜々子 神戸 佐知 神戸 望 刈谷 優 品田 宇彦		小松 正弥 渡辺ほのか 斎藤麻衣子	今井 瑞希 新川紗耶加
	奨励	賞				金子きらり

新潟県音楽コンクール受賞者一覧

部門 回	賞	ピアノ部門	弦楽部門	声楽部門	管楽部門
第 53 回 2018年 (平成30年)	大賞	鈴木 莉歩	塚田 直弥	田部 栞	辻 笑子
	県知事賞	山崎 絢斗			
	最優秀賞	近藤 由都 東宮まゆか 佐藤 直輝 高橋 悠花 井口 里佳 八島みのり 塩谷 翔			
	優秀賞				
第 54 回 2019年 (令和元年)	大賞	石栗穂乃香	後藤 苺瑚	二見 有紀 梅沢ゆきの 比護 慧子	吉井 美月
	県知事賞	片岡菜納子			
	最優秀賞	石井 依吹 島田 陽葵 水沼 志帆 近藤 由都 関塚 羽美 湯本 珠空 上坂 哲生 白井 花音 鈴木 良佳 土屋 光 守橋 萩原佐知子 芽生 結衣・守橋			
	奨励賞	小山璃々子			
第 55 回 2020年 (令和 2 年)	中 止				
第 56 回 2021年 (令和 3 年)	大賞	三宅 月海	大島みなみ 岡島由妃乃	長谷川紗耶 折笠 聖樹 澤井佐希子	吉井 美月
	県知事賞	関塚 羽美			
	最優秀賞	石井 依吹 上坂 琉人 佐藤 直輝 近藤 由都 瀬高 礼乃 栗久 岡崎 央睦 上坂 哲生 高橋 悠花			
	奨励賞	高野 彩			
第 57 回 2022年 (令和 4 年)	大賞	佐藤 梨生	後藤 苺瑚	上田 駆 折笠 聖樹 中島ももみ	辻 笑子
	県知事賞	上坂 哲生			
	最優秀賞	荒谷 知保 池田 寧花 石井 依吹 水沼 志帆 齋藤 業央 刈谷 優 長谷川 悠			
	奨励賞				
第 58 回 2023年 (令和 5 年)	大賞	刈谷 優	大島みなみ	富井 香名	宮田 佳乃
	県知事賞	近藤 由都			
	最優秀賞	福與 七瀬 曾田 雅文 佐野こ 賢 小林 友唯 小林 上坂 琉人 白井 花音 鈴木 良佳 竹内優姫乃 高橋 百花			
	奨励賞				
第 59 回 2024年 (令和 6 年)	大賞	関塚 羽美	小林 天雫	梅澤ゆきの 高橋 日陽 渡邊ちひろ	横内 魁人
	県知事賞	白井 花音			
	最優秀賞	渡辺 碧 齊藤 例音 小林 友唯 曾田 雅文 石井 依吹 須田 詢菜			
	奨励賞	大崎 ふみ			

掲載日：2021年11月07日，

こよみ

11月7日

▽1948(昭和23)年「第1回純正音楽コンクール」(新潟日報など共催)が新潟市で開かれた。66年から名称は「県音楽コンクール」に。

「第1回純正音楽コンクール」は
1948年11月7日に開催された

1995年9月2日

「30回記念コンサート」開催

掲載日：1995年09月03日，

県音楽コンクール

登竜門30年 祝福の調べ

記念コンサート

県音楽コンクール(新潟日報社など主催)三十回を記念するコンサートが二日夜、新潟市鐘木の新潟テルサで開かれ、市民らが聞き入った。

昭和四十一年に始まった同コンクールは、この七月に三十回を迎え、今回は歴代の受賞者を招き記念コンサートが企画された。コンサートは新潟市ジュニアオーケストラの演奏で幕開けし、二十一回ピアノ部門第一位の小杉真二さん



地元出身アーティストらが熱演したコンサート＝2日、新潟テルサ

「白根市出身」の幻想的なモーツァルトの調べに続き、県知事賞の鈴木桂さん(チエロ)「新潟市出身」、同じく本間千也さん(トラネット)「佐渡佐和田町出身」が次々と演奏。第一回のジュニア部門優勝者の

鹿島恵子さん「新潟市出身」がメゾピアノの美声で魅了した。

またゲストとして出演した世界的なピアニストの野島松子さんの奏でる調べに、観客はいつとなく涙ぐんでいた。

掲載日：2000年10月05日，

若き精鋭 調べ 軽やか

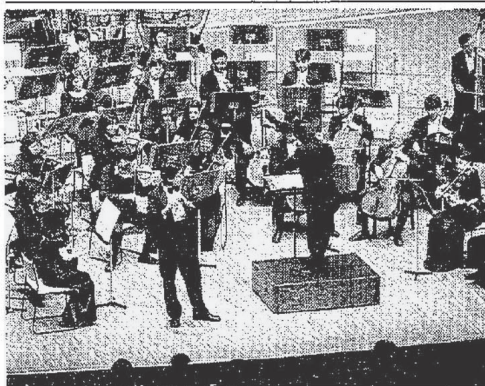
県音楽コンクール出身者演奏会

新潟 東京交響楽団と共演

県出身の演奏家や指揮者(指一さん(テノール)、新潟と東京交響楽団によるコンサート「県音楽コンクール三十五回記念・若き精鋭と東京交響楽団」(県文化振興財団、新潟日報社など主催)が二日夜、新潟市の市民芸術文化会館で開かれた。

今年で三十五回目を迎える県音楽コンクールの記念演奏会として企画された。同コンクールはピアノ、弦楽、声楽、管楽の四部門で、これまで五百四十人の受賞者を送り出している。

コンサートでは、両津市



オーケストラと若いソリストの共演に、客席からは大きな拍手が起こった＝2日、新潟市民芸術文化会館

2000年10月2日

「35回記念コンサート 若き精鋭と東京交響楽団」開催

牧田由美さん(バイオリン)ら、同コンクールでの受賞を機に、現在国内外で活躍する演奏家五人が、東京交響楽団をバックに、コンチエルトなど八楽曲を演奏した。

掲載日:2005年10月16日,

県音楽コンクール四十
回目の節目を記念し、中
越地震復興への願いを込
めたコンサート「絆(き
ずな)」(同コンクール記
念事業実行委主催)が十
五日、長岡市の長岡リッ

被災地励ます 心地よい響き

長岡で「絆」コンサート



ツクホールで開かれた。
同コンクールで受賞し

た若手や審査員を務める
演奏家らが室内楽やピア
ノ連弾などバラエティー
に富んだ演奏を披露。地

元の長岡少年少女合唱団
も登場し、約五百人の聴
衆が心地よいメロディー
に酔いしれた。
音楽番組などで人気の
作曲家青島広志さんが司
会を務め、曲の合間に楽
しいトークをちりばめ会
場を沸かせた。
締めくくりには、同コ
ンサートのために編曲さ
れた「アメージング・グ
レース」を出演者全員で
演奏、被災地へエールを
送った。同コンサートは
十六日も新潟市の市民芸
術文化会館で開かれる。
写真Ⅱフィナーレに「ア
メージング・グレース」
を演奏、会場は感動的な
空気に包まれた(15日、
長岡市の長岡リリックホ
ール)

2005年10月15、16日

「40回記念コンサート 絆」開催

掲載日:2010年10月23日,



話かご

○:今年
〇人が聞き入ったⅡ写真
で45回目を
Ⅱ。

迎えた県音
楽コンクー
ルの記念コ
ンサート
でコンクールの歴代上位
入賞者が次々と登場。ゲ
スト出演の俳優がフラン
スの作曲家サン・サーン
に扮して曲を解説する
演出もあり、ステ
ージを盛り上げ
た。

○:巻高校2年
で吹奏楽部の和田
真江さん(17)は
「楽しそうに演奏
する姿が刺激にな
りました」とにつ
こり。全国で活躍
する先輩の音色
は、演奏家の
「卵」に強く響い
ていた。

2010年10月22日

「45回記念コンサート」開催

掲載日：2015年10月05日、

歴代受賞者による県音楽コンクール50回記念コンサート。オーフェンでは8人で4台のピアノを連弾した。4日、新潟市中央区



「県音楽コンクール（新潟日報社など主催）の開催は、佐渡おけさ「砂山」50回を記念して、歴代の受賞者や審査員らが出演するコンサート「音楽のよここび」（同実行委など主催）が4日、新潟市中央区の市民芸術文化会館で開かれた。半世紀の節目を祝う華やかな演奏で約9000人の聴衆を魅了した。

コンクールは1966年、県内の音楽文化とレベルの向上を目指して始まった。コンサートは、8人による

半世紀祝いの華やかに

県音楽コンクール記念コンサート

新潟

フィナーレは、新潟市ジュニア合唱団による「サウンド・オブ・ミュージック」メドレー。若手からベテランまで、フロアからの垣根を越えた共演に、会場から盛大な拍手が送られた。

第55回新潟県音楽コンクール

中止のお知らせ

第55回新潟県音楽コンクールは、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、中止とさせていただきます。ご了承ください。

すでに出場のお申し込みをいただいた皆さまには、後日あらためて参加料の返金方法などをご案内いたします。何卒ご理解いただきますようお願い申し上げます。

新潟日報社

2020年5月2日 新潟日報朝刊

第56回県音楽コンクール 日程、課題曲は2月末発表



県内外で音楽を学ぶ人が発表する場として、小学生から一般まで幅広い年齢の方が日頃の練習の成果を披露する「第56回県音楽コンクール」を開催します。

県音楽コンクールは、ピアノ、弦楽、声楽、管楽の4部門からなるコンクールです。前身の純正音楽コンクールは1948年に第1回を開催して以来、66年には県内音楽界のレベル向上と音楽文化の振興を目的に、県音楽コンク

日頃の練習成果を競った県音楽コンクールは2019年、新潟市中央区の新潟市民芸術文化会館で開催されました。

例年予選会を6月に上越・長岡・新潟の3会場で実施。本選会を新潟市民芸術文化会館コンサートホールで開催してきました。しかし、昨年の第55回コンクールは新型コロナウイルス感染症が拡大し、中止を余儀なくされました。コンクールの中止は県音楽コンクールの歴史の中で初めてでした。

今年の予選会日程、課題曲などは2月末に新潟日報紙面や新潟日報ウェブサイト上で発表します。3月上旬をめどに要項を配布し、申し込みを開始する予定です。

2021年1月5日 新潟日報朝刊

2020年は新型コロナウイルス感染防止のため、コンクールは長い歴史の中で初めての中止となった。翌年再開。「主催イベント」欄で告知した。

掲載日：2021年06月05日，



○：モーツァルトやバッハらの名曲が披露され、約900人の来場者を魅了していた。聴衆の一人は「久々の生演奏のコンサートで感激した」と満足そうだった。

開かれた写真。○：新型コロナウイルス禍の中でも音楽に触れる喜びを感じてもらおうと、音コンを主催する新潟日報社などが企画した。プロで活躍する石丸由佳さん（オルガン）と高津亜美さん（ソプラノ）のほか、新大付属長岡中の後藤苺瑚さん（バイオリン）らが出演した。

話かご

○：本県ゆかりの若手音楽家の登竜門「県音楽コンクール」の過去の受賞者らによるコンサートが4日、新潟市中央区の市民芸術文化会館りゅうとびあで

2021年6月4日

「チアフルコンサート」開催

掲載日：2023年03月20日，

春の調べ 生き生きと 新潟

音コン受賞者ら演奏会

県音楽コンクールの歴代受賞者らによる「音コン・チアフルコンサート」が19日、新潟市中央区の市民芸術文化会館で開かれた。声楽やピアノなど春の訪れを感じる豊かな演奏に、約1200人が聴き入った。

「春祭」と題して新潟日報社が主催し、約30人が出演した。演目は春にちなんだ16曲で、弦楽アンサンブルとオーボエなどとのピアノ協奏曲や木管五重奏などが披露された。

フィナーレを飾ったのは、ミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」の1曲「すべての山に登れ」。新潟市ジュニア合唱団とバリトンの塙康平さんら声楽メンバーが共演し、会場から盛大な拍手が送られた。

声楽を学んでいる新潟市西



区の竹内遥風（はるか）さん（18）は「『オペラ座の怪人』が印象的だった。アンサンブルが多く、1人じゃできない音楽の楽しさが伝わった」と話した。

写真＝県音楽コンクールの受賞者らによる「音コン・チアフルコンサート」＝19日、新潟市中央区

2023年3月19日

「チアフルコンサートVol2」

開催

編集後記

音楽コンクールが60周年という節目の年を迎えるにあたり、記念誌の発行を計画しました。その積み重ねてきた歴史を何かの形で残したい、コンクールの魅力をお伝えしたいという思いからです。受賞者の方々の話をお聞きしていると、コンクールの雰囲気が伝わってくるようでした。この記念誌がこれからコンクールを目指す人たちの指針となればうれしい限りですし、コンクールの新しい歴史を創ってもらえたらと願ってやみません。

最後にあらためまして、お忙しい中ご協力いただきました北原先生、新通先生をはじめ審査員の先生方、そして受賞者の方々に心より御礼申し上げます。(事務局)

第60回新潟県音楽コンクール

主 催：新潟県、新潟市、長岡市、新潟日報社、BSN新潟放送

後 援：新潟県教育委員会、新潟市教育委員会、上越市

特別協賛：第四北越銀行

事務局：新潟日報社ふれあい事業部

〒950-8535 新潟市中央区万代3-1-1

発 行：2025年7月27日



大賞トロフィー
藤巻秀正作「大空へ」